



第2回再生利用WGでの指摘事項とその対応

2023年9月5日

環境省環境再生・資源循環局

各ワーキンググループ等の役割

中間貯蔵除去土壌等の減容・再生利用技術開発戦略検討会

環境回復検討会



各WG等	<h3>CT</h3> <p>コミュニケーション 推進チーム</p> <p>※ 再生利用や最終処分に関する理解醸成活動について検討</p>	<h3>再生利用WG</h3> <p>中間貯蔵施設における 除去土壌等の再生利用方策検討 ワーキンググループ</p> <p>※ <u>再生資材化した除去土壌を安全に利用する方策</u>について検討</p>	<h3>技術WG</h3> <p>減容化技術等検討 ワーキンググループ</p> <p>※ 減容化・最終処分に関する技術の評価や技術の組み合わせ等の検討</p>	<h3>除去土壌の処分に関する検討チーム</h3> <p>※ <u>福島県外の除去土壌の埋立処分実施方法</u>についての検討</p>
検討項目	<ul style="list-style-type: none"> 次世代、現役世代、自治体、メディア、海外等の各主体を対象とした理解醸成活動や福島県内も含めた情報共有の進め方の検討 その際、具体的な方法として、例えば、以下のツールについて活用・強化策を検討 <ul style="list-style-type: none"> ▶ SNS等も活用した情報発信 ▶ 全国各地での対話に向けた方策（対話フォーラム、小規模な車座等） ▶ 現場公開のより効果的な方策（飯館村長泥地区、中間貯蔵施設における現地見学会等） ▶ 展示やイベント等での情報発信 	<ul style="list-style-type: none"> 実証事業の技術的課題の抽出、対応策の検討 福島県内実証事業結果を踏まえ、再生利用基準・技術ガイドライン（手引き）の検討 	<ul style="list-style-type: none"> ○技術開発 <ul style="list-style-type: none"> これまでの技術実証フィールド等での減容化・安定化等に係る技術開発の技術実証の進捗整理、評価（コスト含む） 減容化・再生利用・最終処分に適用可能な技術、技術の組み合わせ 今後更に実施する技術実証項目の抽出（減容化による生成物の再生利用に係る技術的検討を含む）、進め方の検討 ○最終処分 <ul style="list-style-type: none"> 放射能濃度毎の除去土壌量（推計）の検討 最終処分、再生利用の見込み量の検討（減容化、安定化処理も考慮） 最終処分に関する放射線安全性評価（運搬時・埋立作業時・維持管理時） 最終処分場の構造、必要面積の検討 中間貯蔵除去土壌等について、除去土壌の処分に関する検討チームでの検討状況も踏まえつつ、最終処分に係る埋立処分基準の検討 最終処分、再生利用を踏まえたトータルコストの検討 	<ul style="list-style-type: none"> 福島県外の除去土壌について、埋立実証事業等の結果を踏まえ、埋立処分基準の検討

飯舘村長泥地区の環境再生事業の実施状況に関する指摘事項

飯舘村長泥地区の再生事業の実施状況に対するご指摘

指摘事項	対応方針
<ul style="list-style-type: none">・埋め戻した後どの位置に暗渠排水管が埋まっているのか、将来的に分からなくならないよう暗渠管の位置をきちんと把握しておくこと。	<ul style="list-style-type: none">・暗渠配水管の位置が分かるように、埋設箇所を表示しました。（資料1－3参照）
<ul style="list-style-type: none">・飯舘村長泥地区の環境再生事業の実施状況には安定性のデータがないので、構造安定性に関する長泥の状況を示すこと。	<ul style="list-style-type: none">・飯舘村長泥地区環境再生事業における安定性について整理しました（資料1－3参照）。
<ul style="list-style-type: none">・土で造った土構造物というのは、最初の1、2年に変形が必ず生じるので、維持管理の方法が妥当であるかどうか、あるいは、何か追加すべきかどうかということをするのは盛土を造って最初の1、2年というのがすごく大事である。実際に耕作をしておられる方々が作業をする前に周りを回ったり、あるいは何か異変を感じたりとかそういうところが維持管理につながってくるので、これらのデータをちゃんと積み上げて今後の検討につなげていくこと。	<ul style="list-style-type: none">・日常的な点検の中で、構造物の異変など得られた情報を集約して維持管理方法に反映できるよう検討してまいります。
<ul style="list-style-type: none">・飯舘村長泥地区の環境再生事業では、表土に山砂（遮へい土）を用いていることから透水係数の改善が必要であるが、他の地区、既存のほ場等で仮に再生利用を考えるとなった場合は表土があるので、課題にはならない。手引きの整理上で、長泥での表土の考え方、と他地区での表土の考え方について、目的を持って整理をすること。	<ul style="list-style-type: none">・飯舘村長泥地区の環境再生事業のみに関係する事項と全国で再生利用を実施する際に整理すべき事項と精査及び区分して成果を整理してまいります。

飯舘村長泥地区の環境再生事業の実施状況に対するご指摘（続き）

指摘事項	対応方針
<ul style="list-style-type: none">・ 実証事業では、山砂（遮へい土）を表土として用いた場合に生じる特有の課題を解決するため、暗渠排水設置間隔を7.5mにしていると推察するが、標準的な間隔よりも狭いように思うので、手引きに記載する場合は、内容の検討をすること。	<ul style="list-style-type: none">・ 飯舘村長泥地区の環境再生事業で得られた知見を踏まえて、全国で再生利用を実施する際の方策について整理してまいります。
<ul style="list-style-type: none">・ 覆土50cmで年間被ばく線量を満足するという計算の時に、覆土の密度がある一定以上だと仮定されていたと思うが、耕作土の密度でもそれを満足するのか問題ないのか。維持管理者と共有しておくのも大切である。	<ul style="list-style-type: none">・ 覆土の取扱いについては検討課題と認識しており、耕作土の密度についても考慮の上、関係者と共有してまいります。

福島県(中間貯蔵施設)内での道路盛土実証事業の実施状況に対するご指摘

指摘事項	対応方針
<ul style="list-style-type: none"> ・ 今後、ご説明をされる際、バックグラウンド値とそれから再生資材を利用したことによる数値という、併せて併記すると理解促進につながる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ バックグラウンド値、および再生資材を使用することによる追加被ばく量を併記するなど、分かり易い資料整理に努めてまいります。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 石灰を使っでの改良となるので、染み出てくる水についてはpHが高い場合もある。留意事項などのところに記載するなど必要。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 石灰改良によるpH変化や、その変化に伴い留意すべき事項については分析中であり、今後どのように記載すべきか検討してまいります。